

の集積度が予測できる (原勢ら). また規則化して脆くなつた Ni_3Fe の粒界割れを $\Sigma 1$ (小傾角) 粒界だけから成るよう集合組織を発達させて防止できる (花田(修)ら) など, わが国の研究者の独断場の観が強かった.

K. T. Aust の高純度 Ni に微量添加した S 量によって, 再結晶後の $\Sigma 1$ 粒界や $\Sigma 3$ (双晶) 境界などの特定

粒界の生成頻度が変化するという講演を聴いていると, 彼の手になる材料は魔法に掛かったように反応するのではないかという錯覚に陥るほどである. Aust に限らず, 斯界第一人者の話を存分に聴けたこと, これが今回の会議に参加して今更のように感じた最も大きな収穫であった. これは参加しなければわからない感激である.

編集後記

日本人の長寿命化にともない, サラリーマンの定年後の生き方講座が盛んです. それらを要約すると, 従来の価値観を変えることと, 新しいことに積極的にチャレンジすることの 2 点に尽きるようです.

考えてみますと, 鉄鋼技術者にとっても同様の考え方が必要なようです. 会社の寿命 30 年説が一時流行しましたが, 鉄鋼技術そのものにも明らかに盛衰があります. 現在, 技術の中心が製鉄・製鋼などの上工程から薄板・表面処理などの下工程に移りつつあることは, 万人の認めるどころです. この時当事者はどう対処すべきか? 以前の鉄鋼技術者は一定範囲の専門家に留まり, その専門家集団は何々部落と呼ばれて, 他の分野とは技術的に孤立する傾向が強かったようですが, これからの時代ではもっと視野を広く持ち, 積極的に他分野に出ていくべきではないでしょうか.

筆者は昔スラグに関係していたことがあります, スラグ-メタル反応は, 表面処理の反応に合い通じる一面があります. 従って例えば製鋼技術者から表面処

理技術者への転換も十分可能だと思います. もちろんいきなり転換することは全く無理で, 他技術分野に対する素養や一種のカンが必要です. そのためには若いうちに他分野を勉強したり, できれば実際に経験して, それらを養うことが大切です. 一定年齢以上の人にはもう無理でしょうが, 若い人は今から始めても遅くはありません.

このことを最も強く意識すべきは, 実は薄板・表面処理技術者なのです. これ以下の下工程はないと安心しては非常に危険です. ユーザーインがこのまま進めば, 次の時代で最も活躍できるのは, 単なる薄板・表面処理技術者ではなく, 広い意味でのデザイン技術者でしょう. 順調に見える時にこそ次に備えるべきだということは, 歴史が証明しています. ユーザーを含めた広範囲な技術に関心を持ち, 固定観念に捉われず, 新しい分野に積極的にチャレンジすることは, 定年など夢にも考えていない年代から既に必要なことです.

(Y. M.)